

# 法蔵院時代の漱石私註

二八

## 玉井敬之

(一)

座蒲団の上に半脚を組み、考える。

明治二十七年十二月下旬、夏目漱石は、菅虎雄の紹介状を持って、鎌倉円覚寺の塔頭帰源院に釈宗活を訪ね、宗活の手引きでその師釈宗演に参禅した。この前後の漱石と漱石周辺の事情は、伝記の最も空白の部分として、いまもお残されている。しかし周知のように、このときの参禅の体験は、のちに『夢十夜』の「第二夜」、【門】の宗助の参禅として、作品のなかに表現された。青年漱石の参禅の生活と体験は、いまのところ、この虚構の世界を通してしか、知ることはできないのである。

【門】には次のように書かれている。宗助は、「是からは積極的に人世觀を作り易へ」るために、同僚からの紹介状を持って一窓庵に釈宜道を訪ね、宜道から老師に相見され、「父母未生以前本来の面目は何だか、それを一つ考へて見たら善からう」といわれる。「彼は冷たい火鉢の灰の中に細い線香を燻らして、教へられた通り

其内凝としている身体も、膝頭から痛み始めた。真直に延ばしていた脊髄が次第々々に前の方に曲つて来た。宗助は両手で左の足の甲を抱える様にして下へ卸した。彼は何を目的もなく室の中に立ち上がった。障子を明けて表へ出て、門前をぐる／＼駆け回つて歩きなくなつた。夜はしんとしてゐた。寝てゐる人も起きてゐる人も何処にも居りさうには思へなかつた。宗助は外へ出る勇氣を失つた。凝と生きながら妄想に苦しめられるのは猶恐ろしかつた。

彼は思ひ切つて又新しい線香を立てた。さうして又略前と同じ過程を繰り返した。最後に、もし考へるのが目的だとすれば、坐つて考えるのも寝て考へるのも同じだらうと分別した。彼は室の隅に疊んであつた薄汚ない蒲団を敷いて、其中に潜り込んだ。すると先刻からの疲れで、何を考へる暇もないうちに、深い眠りに落ちて仕舞つた。

この参禅の結果は、「もっと、ぎろりとした所を持って来なければ駄目だ」と老師からいわれ、「喪家の犬の如く室中を退」くほかはなかったのである。

『夢十夜』の「第二夜」は、次のように書かれている。

お前は侍である。侍なら悟れぬ筈はなからうと和尚が云つた。さう何時迄も悟れぬ所を以て見ると、御前は侍ではあるまいと言つた。人間の肩ぢやと言つた。はゝあ怒つたなど云つて笑つた。口惜しければ悟つた証拠を持つて来いと云つてぶいと向をむいた。怪しからん。

隣の広間の床に据えてある置時計が次の刻を打つ迄には、屹度悟つて見せる。悟つた上で、今夜又入室する。さうして和尚の首と悟りと引替にしてやる。悟らなければ、和尚の命が取れない。どうしても悟らなければならぬ。自分は侍である。

もし悟れなければ自刃する。侍が辱しめられて、生きて居る訳には行かない。奇麗に死んで仕舞ふ。

この二つの参禅の世界は、読んでみると、何か異質なものを感じさせる。作家の一つの体験から、二つの異質な世界が創造されることは、別に不思議なことではないだろうが、しかし漱石の場合、鎌倉円覚寺での参禅のそもその動機が、いまもって十分に明らかではないのである。そのときの体験が、宗助の参禅と『夢十夜』の

「第二夜」に表現されているとしたら、この異質なものに注意をむけてみることも必要であらう。

もちろんこの二つの参禅記は、宗助にしても「自分」にしても、雑念・妄念にとりつかれ、迷いに迷い抜いている。しかし宗助には殺気というものがない。宗助は、老師の言葉に「喪家の犬の如く室中を退いた」が、「自分」には、和尚の侮蔑的な言葉に、「屹度悟つて見せる」、「さうして和尚の首と悟りと引替にしてやる」、「自分は侍である」という自恃がある。そうして「どうしても悟らなければならぬ」という焦燥が、積極的に人生觀をかえようとしていた宗助にはみられないのである。では悟れなければ、どうするのか。

座蒲団の下にもぐりこませた朱鞘の短刀がある。この短刀は、和尚にもむけられているし、自分にもむけられているものだ。「森閑として、人氣がない」夜の禅寺で、灯心をかきたてながら、悟ろうとして悟れず、冷たい刃をみつめている凶柄からうまれる鬱屈気は、殺気という言葉で表現してもよいだろう。公案にたいして、

自分は腹痛を悩んでゐる。其腹痛と言ふ訴を抱いて来て見ると、豈計らんや、其对症療法として、六づかしい数学の問題を出して、まあ是でも考へたら可からうと云はれたと一般であつた。

考へると云はれれば、考へないでもないが、それは一応腹痛が治まつてからの事でなくては無理であつた。

と思うのが宗助であった。それにたいして、

趙州曰く無と。無とは何だ。糞坊主めと齒嚙をした。

と焦っているのが「自分」である。

また、この「自分」の和尚にたいする態度と、宗助の老師にたいする態度も違う。その逆の、和尚の「自分」にたいする態度と、老師の宗助にたいする態度も、やはり違うだろう。適切にいいあらわすことができないが、和尚と「自分」の間には、いわば熱気というようなものがあり、老師と宗助の間には、いわば枯淡の趣きともいえるようなものがあるのではないか。「老師」(「門」)と「和尚」(「第二夜」)の呼称の違いにも留意すべきだろう。「自分」にとってはそれはどうしても「老師」ではなかったし、宗助にとってはどうしても「老師」でなければならなかった。「和尚」は「糞坊主」であり、「葉罐頭」であった。ここにも「自分」と宗助の禪へのかかわりかたが示されている。結局、宗助は老師から退かなければならなかった。しかし「自分」はどうなのだろう。

……忽然隣座敷の時計がチーンと鳴り始めた。

はつと思つた。右の手をすぐ短刀に掛けた。時計が二つ目をチーンと打つた。

自分は悟つたのだろうか。無が現前したのだろうか。よくはわからない、どちらとでもとれるように思われる。しかし、この「自分」

は、どうあっても宗助のように、老師から退き、「門の下に立ち陳」む種類の人間ではないだろう。禪寺から退かなければならなくなつた宗助は、「彼は平生自分の分別を便に生きて来た。其分別が今は彼に祟つたのを口惜しく思つた」のである。このような宗助からみれば、さしあたり「第二夜」の「自分」は、「取捨も商量も容れない愚なものゝの「徹一図」と映るのではないだろうか。要するに参禪への心的傾向とでもいふべきものが違ふのである。

おそらく、ここには「門」という小説のなかでの宗助の設定のありようにもかかわっていく問題でもあるだろう。ということは、宗助のイメージが、この小説では、一つのまとまった像として結ばれていくということができないように思われるのである。宗助の日常は「役所へ出ては又役所から帰って来」る毎日であり、家での夫婦は「日毎に地味になって行く人」のような生活をしている。薄暗い「洋灯」の下で弟小六をふくめて三人が晩飯をとりながら、「子供もない癖に」玩具に打ち興じている風景は、何か佻しいというよりも、前途に見極めをつけてしまった分別臭い中年男を、あるいは人生の峠を登りつめてしまった初老の男の生活を思わせるのだ。それは、「宗助は縁に出て長く延びた爪を剪りながら、／＼うん、然し又ちぎ冬になるよ」と答へて、下を向いたまま鋏を動かしてゐた」結末まで、変っていないのである。小説が冬をはさんだ秋から春へか

けての季節の時間に沿って展開していることも、そのような印象をあたえるではあろう。

しかし宗助は、中年ないし初老にかかる男だったのだろうか。宗助とお米が「一所になってから今日迄六年程」たっているのが、現在の時間であるとすれば、宗助はおそらく三十にはなっていないはずである。過去にこの「不徳義な男女」が「蒼白い額を素直に前に出して、其所に燄に似た烙印を受けた」にしても、宗助があたえるイメージと年齢には、やはり何処かに一つの越えがたい違和感があるように思われる。その宗助の年齢は、恰度いま漱石が参禅しようとする年齢にふさわしいはずなのである。

とするならば、このときの漱石の精神は、『門』、『第二夜』の二つの参禅記にあらわれているというようにはいえないのではないか。たしかにそれぞれに漱石の体験が生かされていたにしても、その精神の位相は、ほとんど中年ないし初老をおもわせる宗助よりも「第二夜」により鋭くあらわれているのではないだろうか。

二つの参禅記には公案を前にして、雑念・妄念のなかで分別している人間と、ひた走りにむかっている人間とがいる。

明治二十七年十二月の漱石の参禅は、どういふものであったのか。

(註1)すでに越智治雄氏の「父母未生以前の漱石」(「漱石私

論「昭四六・六所収」に「ところで、悟りの錯覚は『門』においても一人物の口を通して語られているのだけれども、苦惱を抱いた宗助を含めて少なくともその場を包んでいるのは微笑であった。一方『夢十夜』では『自分』にあるのははるかに強い、『切ない』ばかりの衝動感であって、それは抑圧感としてさまざまにデフォルメされてくる」という指摘がある。

## (二)

夏目漱石は、明治二十七年十月十六日、小石川表町七十六番地法蔵院に下宿した。法蔵院に下宿した頃の漱石は、ある激情にとらえられており、その言行には不可解なところが多い。このためか、この前後の事情についても、狩野亨吉、菅虎雄の証言は食い違っている。法蔵院には尼僧数人が住んでおり、それを恐れて菅虎雄の下に走ったというのが狩野亨吉の証言であり、法蔵院下宿以前、菅虎雄のもとに移り、そこを漢詩を書き残して、何もいわずにぶいと飛びだしたというのが、菅虎雄の証言である。この奇怪な漱石の行動について、九月四日、十月十六日の正岡子規あての手紙などから、「親友の家を無断で飛び出さなければならなかったほど、漱石の気持は切迫して険しく、人間の顔といふ顔は、見るも厭で、何か山の奥へでも這入って仕舞ひたいやうにも思はれたのではな

いかと思ふ<sup>①</sup>」と小宮豊隆は書いている。しかし皮肉なことに、法蔵院には、尼僧がいて「少しも殊勝ならず女は何時までもうるさき動物なり」（明27・10・31）と子規に書き送らねばならなかったのである。法蔵院への転居は、すでに諸家がひとしく指摘しているように、この春以来続いていた結核の疑いからくる肉体上の不安と、また後年『文学論』の「序」、『私の個人主義』でも回想しているように、「英文学に欺かれたるが如き不安」が次第に募ってきていた時代でもあった。「理性と感情の戦争益劇しく恰も虚空につるし上げられたる人間の如くにて」（明27・9・4、正岡子規あて）と信頼すべき友人に書き送らなければならなかった時期である。

夏目鏡子の『漱石の思ひ出』によれば、初恋の女性とおぼしい人物や、それによく似た尼僧も、この法蔵院時代に登場してくるのであり、鏡子をふくめて友人狩野亨吉、菅虎雄の証言は、この頃の漱石に関して、そのデータが、極めて錯綜している。そこから、江藤淳氏が記している登世への思慕からくる「和三郎に対する罪悪感<sup>②</sup>」も指摘することができるのであり、あるいは、泷川驍氏の、「彼が三角関係の、苦悩に満ちた恋愛を体験したのであるうこと」、「しかもなほ突き進んで考へると、彼はその三角関係において、不徳義な役割をつとめた当の人間ではなかったか<sup>③</sup>」という想像、ないし仮定も可能なのである。

ともかく、このときの漱石は、統御できないある想念にとりつかれていたことはたしかであって、「理性と感情の戦争」が行為を支配し、周囲の眼から見れば、常軌を逸したものと映ったかも知れないのである。法蔵院時代の漱石についての妻・友人の証言が錯綜しているのも、おそらく、漱石の言行に原因があったと思われる。明治二十四年七月十七日、眼医者であった「銀杏返しにたけながをかけ」た女性が、法蔵院時代の女性として『漱石の思ひ出』に語られていたとしても、鏡子の誤聞とはいちがいえないのではないか。漱石にとっても「狂気」への衝動をともなった異常な時期であり、周囲もまたそのように見ていたとすれば、それは、語っている「本人」や「ほかの方々」にとっても、聞いている妻にしても、その限りでは、真実であったのではないか。漱石にとっては、すでに過去の時間に沈んでしまっていたものまでもふくめて内外の体験が、このとき、一挙におそってきたように思われたのかも知れない。それから逃れるようにして大学寄宿舎から法蔵院に落着くまでの四十日の間、「所々流浪」（明27・10・16、狩野亨吉あて）を続けねばならなかったのである。おそらくは被害妄想の結果であり、生涯の第一回目の「神経衰弱」、内因性鬱病<sup>④</sup>のあらわれであった。そのような時期の法蔵院下宿以前の二十七年夏、松島に遊んだとき、「年来の累を一扫せん」（明27・9・4、正岡子規あて）とし

て、瑞巖寺において「南天棒の一棒を喫し」(同) ようとも考えて果さなかった漱石である。このとき、禪による救済への志向は次第にたかまっていたのである。したがって鎌倉にむかっていたとき、そこで、『門』に書かれているように「悉く寂寞として錆び果て」た禅寺で、老師や禅僧に接して、「今の不安な不定な弱々しい自分を救ふ事が出来はしまいかと、果敢ない望を抱いた」ことはたしかだろう。「凡骨到底見性の器にあらず」とみずから「断念」(前記書簡)していた漱石は、しかし何よりも悟らなければならなかったのである。

ともかくも漱石は参禅した。「閑静」な禅寺で統御できない自己の「不安で不定な」精神と行為を「冷却」するためには、「猛烈に己事の究明に従事」<sup>⑤</sup>するほかはないであろう。「気楽では不可ません。道楽に出来るものなら、二十年も三十年も雲水をして苦しむものはありません」と『門』の宜道という言葉の通りなのである。しかしこれは宗助のものではないのだ。宜道が宗助にあたえた「老師から公案の出来る事や、其公案に一生懸命嚙り付いて、朝も晩も昼も夜も嚙りつゞけに嚙らなくては不可ない事」という「助言」は、むしろ宗助よりも、「第二夜」の「自分」が忠実に従事しているところのものなのである。

懸物が見える。畳が見える。和尚の葉罐頭がありくくと見え

法蔵院時代の漱石私註

る。罅口を開いて嘲笑つた声まで聞える。怪しからん坊主だ。どうしてもあの葉罐を首にしなくてはならん。悟つてやる。無だ、無だと舌の根で念じた。無だと云ふのに矢つ張り練香の香がした。何だ練香の癖に。

自分はいきなり拳骨を固めて自分の頭をいやと云ふ程擲つた。さうして奥歯をぎり／＼と嚙んだ。両腋から汗が出る。脊中が棒の様になった。膝の接目が急に痛くなつた。膝が折れたつてどうあるものかと思つた。けれども痛い。苦しい。無は中々出て来ない。出て来ると思ふとすぐ痛くなる。腹が立つ。無念になる。非常に口惜しくなる。涙がほろ／＼出る。一と思に身を巨巖の上に打つけて、骨も肉も滅茶々に砕いて仕舞ひたくなる。

それでも我慢して凝つと坐つていた。(下略)

「全伽」を組みながら去来する肉体の痛みと想念は、そこから「脱却」し「自分」が志向する境地からはほど遠いであろう。むしろこの焦燥はさらに焦燥をうみ、感情はますますたかぶることになりかねない。しかし、この焦燥と感情のたかぶりこそ、公案をまえにして分別している宗助よりも、明治二十七年の鬱屈した精神の状態にある、意志的に公案にむかっている二十八歳の青年漱石にふさわしいものであった。

(註1) 小宮豊隆「夏目漱石」(昭一三・七)

(註2) 江藤淳「漱石とその時代第一部」(昭四六・八)

(註3) 渋川驥「夏目漱石論」(『近代日本文学研究明治作家論

下』昭一八・二、日本文学研究資料刊行会編『夏目漱石』

昭四五・一所収)

(註4) 千谷七郎「漱石の病跡」(一九六三・八)、加賀乙彦「夏

目漱石論」(『文学と狂気』一九七一・六所収)

(註5) 小宮豊隆前掲書

(三)

ただ「悟らなければならない」という「自分」には、二十八歳の漱石が映っている。この時までの漱石の身辺をみると、後年、

『硝子戸の中』でなつかしく回想している実母千枝の死(明一四・

一)を少年期に送っている。また長兄大一(明二〇・三)、次兄栄

之助(明二〇・六)、さらに敬愛していた嫂登世(明二四・七)の

死をも、青年期にみてきたのである。つまりは多くの近親の死をみ

ているのである。それらの死をふくめて漱石をおそう不安は、おそ

らく「無」というものを最も身近に感じていただろう。それゆえに

「第二夜」の公案「無」は、「父母未生以前本来の面目」に比べて

宗教的であるよりも、よりいっそう人生的なものではなかったか。

ここには放下できない諸縁を放下しようとして「無」にむかってい

る、ひたむきな人間がいるのだ。

この意志的な人間は、漱石の文学に登場する諸人物のなかでは、かなり珍らしい人間像といわねばならないだろう。しかしここに、ある時期の漱石があったのだから、さらにこのような人間像を何処かに求めることは可能だろう。

ここでは、最も直截的な方法をとりたい。つまり作家の影を求めて、小説のなかにそれがどのように投影されているかを、きわめて素朴な私小説的方法によっていくということなのだ。

われわれは作品を通してしか作家は語れないものである。この二つの参禅の記録は、一つは虚構を通して一つは夢としてえがかれている。しかしこの二つの異質な記録は、生の根元を問うていることは、たしかだ。いうまでもなく漱石は、その文学的営為に最も方法的な作家であった。その層々として構築されている文学的建築物の一つから、漱石の影を求めて、作家を小説に登場する諸人物にそのまま同化させるということは、ほとんど怠慢に等しい業として映るだろう。そのようなものを拒否したところにこそ、「クリエーター」<sup>①</sup>としての漱石の自負もあつたはずである。従来、唯一の自伝的な作品だともわいれてきている『道草』にしても、『吾輩は猫である』前後の日常生活の「再現」などではなく、造型への強い意志が働いているのである。<sup>②</sup>したがって、漱石の文学を私小説を読むような

眼で見ることは、事柄の本質を見誤るだけでなく、それをその総体性においてとらえることを不可能にし、幅のせまい一面的な理解におちいることになるのは、あらためていうまでもない。しかしにもかかわらず、この方法をとるのは、かつて正宗白鳥が『道草』についていったという『全作品の註釈書』というような意味での、法蔵院時代の漱石についての私註をとどめておきたいからにはかならない。

(註1) 「田山花袋君に答ふ」(岩波版全集第十一卷)

(註2) 相原和邦『道草』の成立について」文学研究第二八号

昭四三・一二(日本文学研究資料刊行会編「夏目漱石」

昭四五・一所収)

(註3) 平岡敏夫「道草」解釈と鑑賞昭三九・三

#### (四)

相原和邦氏は綿密な実証のうえで、『道草』には、『吾輩は猫である』執筆前後の漱石と、大正三・四年頃の実生活があるリズムを通して処理されていることをあげ、「この二つの時期が選ばれた理由の一つとして、両時期における漱石の精神状況の類似があげられるのではなからうか」といっている。いうまでもなく『猫』執筆当時の漱石は、法蔵院時代におそった「神経衰弱」が再発したときであり、大正三年はやや落着きをとりもどしたとはいえ、第三回の

#### 法蔵院時代の漱石私註

「神経衰弱」におそわれていた時期であった。この第三回の発病前に漱石は『行人』『こゝろ』を執筆しているのである。

『道草』が第二回の「神経衰弱」におちいった時期をかえりみるようなかたちで書かれたとすれば、おそらく前作『こゝろ』は、その最も激情にみちた青年期の漱石が、そこにえがかれているといえるのであって、大正二年に三回目におそった深刻な「神経衰弱」は、過去の発病期への回想をよびおこす因ともなったと思われるのである。ようやく沈静にむかひかけた頃、漱石は、『こゝろ』においてその青年時代を、『道草』においてその作家的出発の時期のそれぞれ苦悩にみちた深刻な体験を、執筆当時の自己の精神状況に重ねながら、一つの文学的世界に造型したといえる。第三回目の「神経衰弱」によって、過去はふたたびよみがえり、ただに『猫』執筆当時の漱石だけでなく、法蔵院時代にたいしても、心情はいちじろしくかたむいているようである。

『こゝろ』は、鎌倉の海岸で一人沖の方に泳いでいく「先生」の姿にひきつけられ、「私」がその後を追うところから始まる。この孤独にひたされた「先生」の姿は、帰京してから訪問した後も変わらない。「私は淋しい人間です」といっている先生の奥にひそむ秘密を、「若かった」「私」は、次第に知りたいたいと思うようになる。その「先生」は思想家として「私」には映ってみえる。

けれども其思想家の纏め上げた主義の裏には強い、事実が織り込まれてゐるらしかった。自分と切り離された他人の事実でなくつて、自分自身が痛切に味はつた事実、血が熱くなつたり脈が止まつたりする程の事実が、畳み込まれてゐるらしかった。

この思想家の「自分自身が痛切に味はつた事実」にせまろうとし、次第にその事実が明らかにされていく筋道は、たくみに伏線がはられていて、ほとんど推理小説の手法といつてよい。ようやくその事実は、「先生と遺書」によって明らかにされていくのである。

「先生と遺書」に記された「私の過去」は、その青春時代にさかのぼる。「暗い人生の影」が、まず最初に訪れるのは、両親の死後、叔父の背信によってであった。

「叔父が私を欺むいた」ために、「永く故郷を離れる決心」をして、東京のある軍人の未亡人の家に下宿したのは、日清戦争後の間もない時期とされているのである。

ある日私はまあ宅丈でも探して見やうといふそぞろ心から、散歩がてらに本郷台を西へ下りて小石川の坂を真直に伝通院の方へ上がりました。電車の通路になつてから、あそこいらの様子が丸で違つてしまひましたが、其頃は左手が砲兵工廠の土塀で、右は原とも丘ともつかない空地に草が一面に生えてゐたものです。私には其草の中に立つて、何心なく向の崖を眺めました。今でも悪い

景色ではありませんが、其頃は又ずつとあの西側の趣が違つてゐました。見渡す限り緑が一面に深く茂つてゐる丈でも、神経が休まります。私は不図こゝいらに適当な宅はないだろうかと思ひました。それで直ぐ草原を横切つて、細い通りを北の方へ進んで行きました。いまだに好い町になり切れないで、がたびししてゐる彼の辺の家並は、其時分の事ですから随分汚ならしいものでした。私は露次を抜けたり、横丁を曲つたり、ぐる／＼歩き廻りました。

そういうとき、「素人下宿」の未亡人の家を見出すのだ。これを、時は日清戦争のさなか、場所は、明治二十七年十一月一日、正岡子規あての手紙

小生の住所は先（こ）殿通院の山門につき当り左りに折れて又つき当り今度は右に折れて半町程先の左側の長屋門のある御寺に御座候（下略、略図略）

として図示されているものと、あれこれ対照した場合、おそらく符合するはずである。時にずればあつても場所は法蔵院であることは、ほぼ間違いない。この劇の舞台は、法蔵院に設定されている。

『こゝろ』の、「先生」が遺書を書いた時点は、乃木大将殉死後の間もない時期、大正元年秋頃とみてよいだろう。この時点から「先生」は伝通院附近を回顧している。すでに二十年前と今の伝通

院附近とは、「様子が丸で違ってしまった」が、其頃は「見渡す限り緑が一面に深く茂っている丈でも、神経が休ま」るような場所だったことにも注意しよう。『こゝろ』にはこのように回想されているのであって、漱石が法蔵院に下宿した一因もまた、ここにあったであろう。だからといって「先生と遺書」にみられるような悲劇的な事件が、漱石をめぐっておこったというつもりはない。渋川驍氏のように「想像」することは十分可能であると同時に、またそれを否定することも可能だからだ。ただ漱石は、『こゝろ』において、「理性と感情の戦争」にはげしく苦悩した青春時代の一端を、あるいはかくあった、かくあるべきであった法蔵院時代を、いま深刻な「神経衰弱」の沈静をみ、明治が終ったこのとき、ようやく表現するこゝろができたということなのだ。

「私」が訪ねて行く先生の家庭は、まったく家の外の世界とのつながりを持っていない。先生が外出するのは、雑司ヶ谷にある友人の墓に「御墓参り」に行くのと、同郷の友人が上京したとき、二三の人とともに食事をしたことと、「時々奥さんを伴れて」、音楽会や芝居、簡単な旅行に行くくらいである。あるいはまた「先生」が遺書を書き認めている間、奥さんが「市ヶ谷の叔母の所」へ看病に行っているくらいであって、これをしも、つながりといえはいるかも知れない。しかし人が日常のなかで避けることが出来ない外の

世界は、この家庭には、一歩も入ることが出来ないし、みずからもそれを絶っているのだ。これは「私」についてもいえるのであって、友人といえる者を持っていない。「若い」というにはこれはあまりにも異常であって、共通して厭人的・厭世的な性格が濃厚である。ここには『こゝろ』執筆当時の漱石の心境が反映していることは、大正三年三月二十九日津田青楓あて、大正四年四月十四日寺田寅彦あての書簡に、それぞれ「私は馬鹿に生れたせるか世の中の人間がみんないやに見えます夫から下らない不愉快な事があると夫が五日も六日も不愉快で押して行きます」、「近頃は人を尋ねずあまり人も好まず何だかつまらなさうに暮居候」とあることによってもあきらかである。

二十年前、叔父に欺かれたことで「他のものも必ず自分を欺くに違ないと念ひ詰め」て、ひたすら自己のなかに閉ぢこもり、後の生涯を自己の深淵をのぞきみながら、「自分を生理」にするかのようにな世のつながりを断った「先生」や、その後を追尋している「私」が外的世界を失っていることは、まだわれわれの理解できる範囲にあるといえよう。しかし「先生」が下宿した未亡人の母娘もまた、外の世界との関係を持っていないのだ。戦死した遺族の慎ましい家族と一応はとらえてみても、その生活は、必ずしも灰色であったとはいえないのであり、「艶めかしい装飾」があったり、「書物ばかり

買ふ」先生に、着物をこしらえることをすすめ、日本橋まで母娘に同伴させたりするのである。しかし「先生」とは違つてこのときこの母娘は「厭世的」ではないのだから、いわゆる向う三軒両隣、近所合壁とのつながりを持っていないことで、その日常は、やはり他と異なつていたといわざるをえないだろう。

しかしそれは、「先生」が望んでいたことではなかったか。

私の宿は人出入の少ない家でした。親類も多くはないやうでしたが、極めて小さな声で、居るのだから居ないのだから分らないやうな話をして帰つてしまふのが常でした。それが私に対する遠慮からだとは、如何な私にも気が付きませんでした。

ついに「下宿人の私は主人のやうなもので、肝心の御嬢さんが却つて食客の位置にゐると同じ事」になつてしまふ。「先生」が見出した伝通院界隈の未亡人の家も、また世間から遮断されていたのであつて、このときの先生の「沈鬱」な心にとつては、まことにふさわしい場所であつたといえよう。そしてこれは、極めて厭世的にもなつていた二十七歳の漱石が見つけた法蔵院でもあつただらう。それが一つの寺院である以上、俗世間からの出入は、なにがしかの制限があると思われたはずである。つまり未亡人母娘の「素人下宿」こそは、現実の法蔵院の変化したものであつた。こうみてく

ると、Kが「此家族の一員」になつてからのお嬢さんの態度が、「先生」にどう映つたかということも、一つの興味ある視点を提供してくれるだろう。

ある日私は神田に用があつて、帰りが何時もよりずつと後れました。私は急ぎ足に門前迄来て、格子をがらりと開けました。それと同時に、私は御嬢さんの声を聞いたのです。声は慥にKの室から出たと思ひました。玄関から真直ぐに行けば、茶の間、御嬢さんの部屋と二つ続いてゐて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、といふ間取なのですから、何処で誰の声でした位は、久しく厄介になつてゐる私には能く分るのです。私はすぐ格子を締めました。すると御嬢さんの声もすぐ已みました。(中略)……

襖を開ける、其所に二人はちやんと坐つてゐました。Kは例の通り今帰つたかと云ひました。(中略)

私は何か急用でも出来たのかと御嬢さんに聞き返しました。御嬢さんはたゞ笑つてゐるのです。私は斯んな時に笑ふ女が嫌でした。若い女に共通な点だと云へばそれ迄かも知れませんが、御嬢さんも下らない事に能く笑ひたがる女でした。然し御嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不断の表情に帰りました。

また

一週間ばかりして私は又Kと御嬢さんが一所に話してゐる室を

通り抜けました。其時御嬢さんは私の顔を見るや否や笑ひ出ししました。私はすぐ何が可笑しいのかと聞けば可かつたのでせう。それをつい黙つて自分の居間迄来て仕舞つたのです。だからKも何時ものやうに、今帰つたかと声を掛ける事が出来なくなりました。御嬢さんはすぐ障子を開けて茶の間へ入つたやうでした。夕飯の時、御嬢さんは私を変な人だと云ひました。私は其時も何故変なのか聞かずにしまひました。たゞ奥さんが睨めるやうな眼を御嬢さんに向けての気が付いた丈でした。

これは嫉妬というものであらう。しかし法蔵院というフィルターを通してみれば、そこにおのずから別の風景が開かれてくるようにも思われるのである。すでにKが同居する以前においても「奥さん」や「御嬢さん」に警戒の眼をむけたことがあつたし、また突然男の声がして疑心にとらえられ、「私の神経は震へるといふよりも、大きな波動を打って私を苦しめ」たこともあつた。それらのことをもあわせてみれば、『漱石の思ひ出』に書かれている「背のすらつとした細面の美しい女」との「縁談」、「ともかく法蔵院へ行ってゆつくり尋ねて見たら仔細もわかることだらう。かう思つてお寺へ行かれた」兄や、尼僧とのトラブルがそれに重なってくるだらう。いわばそこには、「神経衰弱」による被害妄想の小説への反映があつたとはいえないだらうか。

#### 法蔵院時代の漱石私註

「其思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれてゐる」ことは、たしかであつたのだ。

(註1) 相原和邦 前掲論文

#### (五)

このようにして『こゝろ』は、法蔵院時代への追体験であつた。この閉された、ほとんど密室のような家を舞台にして深刻な劇が展開する。すでに越智治雄氏も指摘しているように「先生」と「K」とは同時に故郷を失っていること、「二人は同時代人であり、そのゆえにほとんど感覚をさえ分かち合える共通性を備えていた」人物として、ここに登場してくるのである。<sup>①</sup>しかし「先生」からみたKは、激情をうちに秘めた人間としてあらわれる。「道」を選んだ「一図な彼は、たとひ私がいくら反対しやうとも、矢張自分の思ひ通りを貫ぬいたに違なからうと察せられます」と先生はいうのだ。学問が目的ではなく、「意志の力を養つて強い人になるのが自分の考だと云ふ」Kにとっては、「艱苦を繰り返せば、繰り返すといふだけの功德で、其艱苦が気にかゝらなくなる時機に邂逅へるものと信じ切つてゐたらしい」のである。したがってKの前に横たわるものは、無限の「精進」以外にはないのであらう。その「精進」とは、「靈のために肉を虐げたり、道のために体を鞭つたりした所謂難行

苦行の人」のあとを追うことであつた。珠数の環を日に何遍も勘定しているKの姿に、激情をうちに秘めながら、しかしその激情のゆえに次第に「神経衰弱」に落ちいつていく人間を認めなければならなくなるだろう。

ある夏休みKとともに房総に旅行したとき、「先生」は、突然Kの襟頭を後からつかみ、

斯うして海の中へ突き落したら何うすると云つてKに聞きました。Kは動きませんでした。後向きの儘、丁度好い、遣つて呉れと答へました。私はすぐ首筋を抑えた手を放しました。

という挿話にもKの人間像はあざやかにうかがひあがつてくる。この「先生」とKの姿こそ、まさきもない一つの青春というものであり、その暗いパセティックな一面を浮き彫りにしている。いうまでもなくこの房総旅行に、明治二十二年八月、約一ヶ月にわたる友人との旅行を指摘することができる。Kとともに訪ねた誕生寺もこの旅行からうまれた『木屑録』に記されている。しかしKとともにこの住持に会いに行ったとき、それは、二十七年夏、松島瑞巖寺で「南天樺の一樺を喫し」ようとしたときの漱石に、はるかに近いのではないか。また時には、「不意に立ち上り」「遠慮のない大きな声を出して怒鳴」ったり、「只野蠻人の如くにわめく」姿は、「南相の海角」で「狂瀾の中に没して瞬時快哉を叫ぶ」漱石でもある。この

房総旅行の挿話には、明治二十二年と二十七年の事件が織り込まれているのであつて、ことに二十七年夏の体験が、「先生」とKの内の世界に投影されているのだ。「元来小生の漂泊は此三四年來沸騰せる脳漿を冷却して尺寸の勉強心を振興せん為のみに御座候」という正岡子規あての手紙（明二七・九・四）は、あたかもこの二人のためにあるかのようなのである。

この「こゝろ」の暗い情熱にとらえられた二人の青年の姿は、相互に牽引し、その人格を侵蝕しつつ生きていくがゆえに、ともに漱石の精神的分身であつたといえる。この二人の劇的な葛藤のなかで、「先生」はともかくもまだ日常的生のなかで生き得るし、また生きてもいるのだが、しかしKはその激情のゆえに、ともすると日常的な生から逸脱する危険が十分にあるのだ。

「現実と理想の衝突」と後年「先生」は回想するのだが、「理想」にとりつかれ肉体と精神とを切り離し、「自分で自分を破壊しつつ進」んでいくKのパセティックな姿こそ、まさしく悲劇的である。

「覚悟、——覚悟ならない事もない」と独言のようにいうKの危機的な情熱は、「沸騰せる脳漿」のもっとも激した瞬間ではなかつたか。ここには、日常的な生を受けつけることが出来ない何かがある。このとき「先生」とKとの間には無限の距離がおかれたといふべきであつて、もはや言葉では通じることが出来ない世界にKは足

を踏み入れていたのであろう。それは菅虎雄のもとを何も云わずに漢詩を残してぶいと飛び出した漱石に通じるところがあり、若き日の漱石の引き裂かれた精神の激しい断面を示しているのではないか。

『こゝろ』によって漱石は自己の青春につながった。すぎさった青春の精神と情熱をおぎなうことで『こゝろ』は成立したのである。とりわけKの激情は、危機的であることにおいて遠く「第二夜」の「自分」につながっている。

かう考へた時、自分の手は又思はず布団の下へ這入った。さうして朱鞘の短刀を引き摺り出した。ぐつと束を握つて、赤い鞘を向へ払つたら、冷たい刃が一度に暗い部屋で光つた。凄いものが手元から、すう／＼と逃げて行く様に思はれる。さうして、悉く切先へ集まつて、殺気を一点に籠めてゐる。自分は此の鋭い刃が、無念にも針の頭に縮められて、九寸五分の先へ来て、已を得ず尖つてるのを見て、忽ちぐさりと遣り度くなつた。身体の血が右の手首の方へ流れて来て、握つてゐる束がにちやく／＼する。唇が顫へた。

このときの「自分」は、そのままKのものでもあつたのだ。つまり、「寒い風」の吹く「土曜日」の夜、下宿の二階で、一人、「覚悟、——覚悟ならない事もない」とつぶやきながら、じつと短刀に見い

っているKの暗い姿とかきなってくるであろう。「第二夜」にただよう「殺気」は、たしかにそのようなことを感じさせるのである。しかしこのようにして、『こゝろ』がなりたつたことは、「自由と独立と己れとに充ちた」現代の、「倫理的に育つた人間」の、漱石における明治という時代の青春が、このときここで完了したということにはならないだろうか。この二人の悲劇は、青春の完了をモチーフにしたとき、はじめてよく造型しえたのだ。

(註1) 越智治雄前掲書